

日本留学で得たもの

2002年10月～2003年9月受入交換留学生

韓国カトリック大学 李 琿庚

李 蓮周

2003年4月～2004年3月受入交換留学生

韓国カトリック大学 金 英朱

鄭 炳熙

崔 鉉範

韓国光云大学 林 慶眞

信州大学への留学で得たもの

李 琿庚 (イ・ユンキョン)

(韓国カトリック大学言語文化学部日語・日本文化専攻4年)

2002年4月、信州大学への交換留学が決まった後、私は胸がいっぱいだった。充実した1年間の留学にするため、計画を立て始めた。以前、2000年7月から2001年6月までの語学留学の経験があったため、2回目の留学は意味がより深かった。

東京での日本語学校でできなかった様々なことができればいいなと思っていたが、10ヶ月が経った今、ふりかえてみると、とても多くの経験ができたと思う。日本の大学生と同じように、仲間に入って勉強もでき、いろいろな交流もできた。また、日本の伝統的な文化体験もできた。日本に来る前実際にできるか不安だったことが、おかげで全部できた。

まず、日本語教育の学生のやさしさをはじめ、生け花の観賞やホームステイを通じた文化経験など、全部信州大学でなければできないことだった。また、留学生センターの伝統文化実習の授業を通して、様々なことができた。例えば、ことや三味線、書道や民謡、俳句などいろいろなことが自ら体験できた。

そして、それがきっかけになって、茶道を習い始めた。茶道の矢澤先生と知り

合って、茶道以外にも和菓子作りや着物の着付けなども接する機会があったので、とても良かった。留学生の立場にある私に、娘のようにやさしくしてくれた。また、3月には、裏千家の入門小習の許状ももらえることになった。

また、ホームステイを通して日本家庭の雰囲気を楽しむことができた。指導教官の紹介で、年末年始に2泊3日にホームステイしたのがきっかけになって、今も続けて交流をしている。たまに家に遊びに行ったり、食事をしたりしながら娘のように姉妹・兄弟のように自然に文化体験ができた。日本の伝統的な行事やいろいろな話などを通して、また写真を見て、日本と韓国の共通点を見つけた。日本と韓国ではない、同じアジアの人であることにあらためて気が付いた。ホームステイ先のお父さんとお母さんは第2の両親であり、ホームステイ先の方々は第2の家族であると共に、大切な人々である。

多くの文化体験以外にも、大学生活でも非常に有意義な経験ができた。韓国に興味を持っている日本人の友人との交流から、日韓ではない、同じアジアの大学生であるという考えを持つようになった。また、日本の大学生の一般的な大学生活を味わった。一緒に家でお好み焼きを作って食べたり、飲み会に参加したりすることを通して、日本の若者の文化を味わうこともできた。

しかし、信州大学で一番よかったのは、沖先生の日本語教育学概論と現代日本語学演習Ⅰという授業である。大学院の進学を目指している私としては、初めてのゼミ授業の参加から、様々なことを学ぶことができた。レジュメの作り方や発表の仕方など、また、グループ発表の準備を通して、日本の大学生と同じように授業に参加できて、授業全部が勉強になった。

これ以外にも、人文学部や留学生センターの多くの行事参加を通して、言葉では表現できない意味深いことがたくさん経験できた。りんご狩りやふれあいパーティー、温泉旅行などは、日本ではじめて体験したことであった。

このような様々なことは信州大学でなければできないことであった。多くのことができるように、いろいろ指導して下さった沖先生に多大な感謝の気持ちを伝えたい。また、同じ韓国人であり、いろいろな相談にのって下さった延先生、日本語を指導して下さった佐藤先生や坂口先生など、信州大学の先生がたには大変お世話になった。最後、お別れ会まで開いてくれた、日本語教育専攻の学生たちにも感謝したい。約1年間にわたった信州大学への交換留学は、一生忘れられない、大きな思い出になり、財産になるだろう。

日本での1年

李 蓮周(イ・ヨンジュ)

(韓国カトリック大学言語文化学部日語・日本文化専攻4年)

2002年は、私にとって大切な年であった。韓国のカトリック大学の学生である4年生のとき交換学生として選ばれ、長野の信州大学で勉強することになった。日本に来る前までは、普通の学生と同じように大学生生活を満喫していた。さらに日本語を勉強しているにもかかわらず、来日して留学生活を送るというのは考えすらしなかった。

しかし、4年生のある日、学校の掲示板で交換学生に関する募集要項をみてなぜか血が沸いているのを感じた。その時、自分の人生に新しい活力を吹き込むため、また最後の大学時代を美しく飾るため、急いで応募することになったのである。信州大学に来てまだ1年も経たないが、いくつかの楽しいことに接することができて本当にうれしかったと思う。それでは、その楽しかった経験についていくつか書くことにする。

まず、日本の伝統文化の体験が挙げられるだろう。留学生のための伝統文化実習がきっかけになって茶道に接することができたのは誠に幸運だと思う。初めは、ただのお茶を飲むのにそのような難しい礼儀作法が必要なのかと思ったが、その実習を通じてその深さと面白さに感心した。それで、現在は授業で教えてくれた矢沢先生の門人になって本格的な茶道を学んでいる。一週間に一回だけの茶道授業であるが、真の日本を少しずつ理解できるようになった。また、これも伝統文化の体験かもしれないが、信州大学での弓道部活を始めたのがそれである。このサークルに入ることになったのは、すでに部活をしていた後輩の紹介があったからである。部活を始めたもとの理由は、日本の学生と話し合いながら友達を増やしていくためであった。もちろん、このサークルを通して親しくなった日本の学生ができたのは言うまでもない。しかし、もっと大きい収穫と言えるのが弓道そのものである。弓道の練習は毎日行われている。この練習に毎日参加するうちに、何気なく弓道が好きになったのである。これは自慢かもしれないが、その練習のおかげで、2003年4月に塩尻市で開かれた弓道審査に参加し、初級の資格を獲得するうれしさも味わったのである。もちろん、今も毎日弓道の練習をしている。余談であるが、そのせいで、右の腕がだんだん太くなって左との均衡を失ってしまった。

第2に、日本の家庭との出会いがあったことである。2003年1月、指導教官の沖先生の紹介でホームステイをすることになったのである。縁ができた家庭は小林家の人々であった。小林家族とは1月に会って以来、今までも続いて連絡を

取っている。小林家族の皆さんはいつも親切にしてくれて、まるで自分の家にいるような気がするくらいであった。さらに、日本の名所、たとえば、上高地、高山、乗鞍など今まで旅だった日本旅行の半分以上は小林家族と一緒にであった。また、体の調子を崩したときは、病院にも連れていてくれるなど、ややもすれば、疎かになりやすい留学生の健康にも気を使ってくれた。それでいつも感謝している。

第3に、信州大学での授業経験である。外国人として日本人学生と同じ授業を受けるというのは、相当プレッシャーがあったことだった。今はそれなりに様々なことが感じられ、大切な経験であったと思う。たとえば、指導教官のゼミの場合は、日本語教育についての方法論を学べて良かったと思う。それは自分の専門と関連があるからである。最後に、松本NHK文化センターでのアルバイト経験である。初めての韓国語講師の経験だったので、初めたばかりはなれなく、少し大変だった。しかし、すぐ教える方法や学生だちになれ、最後に別れるときは、満足感でうれしいくらいであった。この経験を通じ、社会生活の自信感も持つことになった。

上に述べたことだけでも松本の信州大学で得たのは、未だに経験したこともない楽しさであった。一年間の留学生の生活を通し、いい人々との出会い、そして様々な経験は自分の人生にとって間違いなく大きい財産になり、また新しい人生の出発点になると信じている。

日本でのなじみがたい生活を導いてくれた指導教官の沖先生、人文学部の坂口先生、そして留学生センターの佐藤先生に感謝の言葉を伝えたい。

一年間の留学生活

金 英朱 (キム・ヨンジュ)

(韓国カトリック大学言語文化学部日語・日本文化専攻2年)

私は信州大学に行くために韓国で面接を受けたとき、「2003年日本で勉強することが人生の計画の一部です。」というくらい日本で勉強することを楽しみにしていた。そして、信州大学に行く事が決められた後は「悔いが残らないように頑張ろう」と思った。そのためには、「何でも積極的に経験すること、日本だけで習える事を身につけること、人と人の出会いを大事にする事」を決心した。

まず、色々な体験をするため、休みになると、奈良、大阪、静岡、新潟などを旅行した。海で手首を捻挫した時もあるし、ひどい暑さでアトピー性皮膚炎がひどくなり、大変な思いもした。しかし、私自身をより強く鍛える機会になったと思う。また、最後の旅行として、奈良井と木曾福島を一人で旅行したこともいい

思い出になった。

そして、日本人の友達とより接するために2週間ごとに韓国の料理会を開いた。韓国の料理に興味を持っている信州大学生に作り方を教えてあげたいと思ったことが始めるきっかけになった。単純に楽しいだろうと思って始めたが思ったより手間がかかったり、面倒なことが重なるときは大変だった。しかし、公民館を借りるところからごみを捨てるまで、責任を取ってするうちに責任感とやりがいを実感できるよい機会になった。運のよかったことに料理会は順調で1月30日には、公民館の館長さんに頼まれ、日本人の主婦を対象にした料理会を開くことになった。私は、韓国のダックドリタンとチジミを見本になって作って見せたり、韓国の調味料をくばったりした。最後の料理会が無事に終わってほっとしながら、調理室を出たときの気持ちは忘れられないと思う。

また日本でしか習えないことを身につけるために茶道を始めた。カトリック大学の先輩がすでに茶道を習っていたので、はじめやすかったし、先生とも自然に接することができた。私はお茶をたてるときの節度がある様子が格好よく見えたし、和菓子と抹茶がおいしかったため、茶道をはじめようになった。しかし、正座ができなくてすごく大変だった。一分も経たないうちに足がしびれてしまい、おいしい和菓子や抹茶の味が全然、分からなくなったときもあった。そのため、通い始めて二ヶ月になるまでは「すみません。止めさせていただきたいです。」というせりふを準備して行くくらいだった。しかし私は、時間が経てば経つほど、茶道が好きになった。学校や家のことは全部忘れて、安らぎを覚えながらお茶をたてられる、金曜日の3時が好きになったのだ。先生と一緒にお茶を飲みながら話しているとよく黒い猫のミーちゃんが自らドアを開けて入ってきた。ミーちゃんの機嫌がいいときは、私のひざの上に座ってくれたりした。ミーちゃんのため、足は感覚がなくなるくらいしびれてしまったけど、怖くて全然触れなかったミーちゃんと親しくなれたことがうれしくて、我慢して正座をしていた。よりうれしいことに、九ヶ月間茶道を続いたことが認定され、認定証ももらうことができた。

最後に、人と人の出会いを大事にし、私には二人の両親ができた。私は、担当の先生からホストファミリーの小林家を紹介してもらい、時々食事に呼ばれるようになった。一人で寂しかった私は、大学であった事をしゃべったり、困った事があつたら相談したりした。特にお母さんと私は、料理に興味があつたので、日本の家庭料理を作ってもらったり、私が韓国の料理を作つてあげることで喜んでもらえるようになった。私は親しくなるにつれて国や文化は違ふけれど、真心を込めて接すれば心は通じるのだと思えてきた。去年の9月に韓国から私の両親が来たとき、小林さんは家に招待してくださったり、一緒に旅行をしてくださって本当に心から感謝している。小林さんの家族のおかげで日本での旅行が楽しかつた私の両親は、小林さんの家族が韓国に遊びにくる事を楽しみにしている。

日本での一年間、勉強や旅行や人との出会いを通じて経験したことは私の人生の宝物になってくれるはずだ。特に出世払いを楽しみに待ってくれると約束した小林さんの家族は、私のこれからの人生に大きな助けになってくれると思う。このような経験ができるように機会をくださった沖先生とカン先生とイ先生に感謝の気持ちを伝えたいと思う。

貴重な信州での1年

鄭 炳熙(ジョン・ビョンヒ)

(韓国カトリック大学言語文化学部日語・日本文化専攻2年)

初めて経験する留学生活は不安が半分、胸がわくわくする気持ち半分の新しいスタートでした。名古屋空港に着いた私達は松本に行くアルピコバスの中でここが本当に日本？韓国とあんまり変わらないな、私達本当に留学するんだよね、という話をしながら留学生活をまだ実感できずにいました。私大丈夫かなあ、という不安と頑張るぞという固い決心で私の頭の中がいっぱいになるうちバスは走って約3時間後松本に着きました。駅には迎えに来てくれた日本語教育学の学生達が私達を待っていました。日本での初めの日、愛葉の部屋で愛葉と話をしながらすごく緊張したことを覚えています。私の発音はへんじゃないかな、私の答え理解できたかな？という心配から私の留学生活は始まりました。

4月9日まではあちこちのガイダンスに参加したり市役所と銀行でいろいろ手続きをしたりして毎日が忙しかったです。こんな忙しいスケジュールの中で愛葉は毎日手伝ってくれました。いよいよ授業が始まりました。

私は留学生センターの授業と1年生の共通教育授業、人文学部の授業をとりましたが留学生センターの授業は思ったより難しくなかったです。留学生センターの授業で一番楽しかった授業は伝統文化実習という授業だった。松本でまりを作ったり短歌を作ったりしました。私が作った短歌が日本全国短歌大会で特別賞をもらったことは本当に思い出に残ると思います。着物を着てみたり茶道をしてみたり、この授業は外国人にとってなかなか身につけることが難しい日本文化を身につけるいい機会になりました。

共通教育授業は主に韓国関連の授業をとりました。延先生のお誘いもありましたが韓国関連の授業を通じて韓国に興味を持っている学生に韓国の事を紹介しながら友達になれると思ったからです。授業中時々日本人学生から質問を受けて答えたことがありました。初めは私の発音がへんで学生達が笑ったらどうしよう、という不安で恥ずかしかったのですがだんだん慣れて気軽に答えるようになった私の変化に自分でもびっくりしたことがありました。延先生の授業は私が思ったと

おりでした。日本人と自然に付き合ったり韓国のことが説明できたからです。特に一ヶ月に一回くらい行った韓国料理会は日本人と韓国料理を作りながら楽しく話せた貴重な時間でした。一年間の留学生活の中で延先生は時にはお母さんに時にはお姉さんになってくれました。

人文学部の授業は私にとって一番難しい授業でした。日本語教育概論は20%しか理解できなかった時があつて試験を受けるのが心配でした。しかし前期が終わって成績が出た時は自分なりに自信がついて後期もとりたいたい授業になりました。後期には自信がついたおかげで日本文学概論も取りました。韓国で日本文学をあまり読まなかつたので授業を理解するのが大変でしたがレポートや宿題をするために日本文学を読むことで関心がなかつた日本文学にも興味を持つようになりました。

一年間の留学生活を振り返ってみると辛いこともありましたが、それより楽しいことと嬉しいことがいっぱいでした。だから笑いながら一年をおしまいにできると思います。特にいろんな人とめぐり会っているような思い出ができました。沖先生の紹介で知り合った中川さんの家族は私の第二の家族になってくれました。私は長女ですのでお姉さんとお兄さんがほしかったのですが、その願いが叶いました。中川さんの家で泊まって生活しながら私は日本の平凡な家庭を経験しました。一人だったら寂しかったかもしれないお正月も、家族と連休を楽しく過ごせました。

そして5月から茶道を習いながら知り合った矢沢先生からは手作り和菓子とお茶をいただきながら一週間を反省、計画する貴重な時間をいただきました。

最後に私が一番好きな友達！初めは、日本人は表と裏があつてなかなか友達になりにくいなあと思いましたが、たくさんの友達と出会って私の固定観念はなくなりました。友達はみんな、一年間私を引っ張ってくれましたが、特にチューターの愛葉と散歩の友達の佳苗さんに感謝しています。宿題、レポートを書く時のみならず私の生活全体で力になってくれた愛葉、ほぼ毎日一緒に散歩しながら私の悩みと色々な話を聞いてくれた佳苗さん、大事な友達と別れるのは本当に寂しいですが永遠の別れではないと思うので笑いながら別れようと思います。

一年間私を支えてくれたみんなに恥ずかしくない私になるため、もう一度新しいスタートしようと思っています。韓国に帰ってもいつもこの一年を思い出しながら、私は私の場所で一生懸命努力したいと思っています。

短い留学を終えて

崔 鉉範 (チェ・ヒョンバム)

(韓国カトリック大学校言語文化学部日語・日本文化専攻3年)

外国語専攻の学生にとって、留学は自分の実力を上達させるために一度は経験しなければならないことだろう。しかし、韓国の男は軍隊を終えるまでには長期間の海外旅行と留学は法律的に制限されるため、徴兵以前に留学をすることはよほど難しいことだ。そのため、軍隊を終えた2002年は、自分も必ず国費留学か学校の交換留学試験を受けようと心に決めていたところだった。運が良く、復学して受けた交換留学試験に合格して2003年は信州大学に留学することになった。しかし、初めての留学というのは期待や嬉しさもいっぱいだが、そのかわり心配も多かった。いつも世話をしてくれた家族や親しい友達と離れて、外国で一人暮らしをしなければならない。そしてまた、決まっている生活費の中で生活しなければならない。当たり前な全てのことに不安を感じた。ついに日本にきた4月1日、名古屋空港から松本に来るバスの中でもこのような不安は続いていた。しかし、松本駅で喜んで迎えてくれた日本語教育学専攻の学生達を見ると、いつのまにか不安は留学の期待に変わっていた。私の初めての留学はそう始まった。

言い切れる事は、留学生活は緊張の連続だということだ。この緊張は自分の実力や能力に反比例するかもしれないが、何よりどこに行っても自分の母語ではなく、外国語で聞き、話すことが一番疲れることだと思う。最初、最も大変だったことも、もちろんその「言語の壁」だった。韓国語と日本語は文法も似ているし、同じ漢字文化圏だから語彙もあんまり違いがないだろうと甘く見た私は、日本語が思った以上に違うことに驚いた。もちろん漢字と語彙が足りない私が苦労した事は言うまでもなかった。それに、言葉は知っているが、正確な発音ができなくて相手に通じないことも多かった。相手が何を話しているか分かっているがそれについて話しができない、自分の意見をはっきり言えないということは、たいへん歯がゆくて苦しいことだった。今振り返ってみると、このような理由で半年くらいは無口だったと思う。しかし、留学生活は自分の努力無しには何も得ることができない。それで、12月にある日本語能力試験の準備をしながら語彙を増やす努力と、歌やニュースを聞きながら会話の練習を一人でしたこと、そして、何よりも実際に色々な人と話しをした経験が、今自分の日本語の力をたくわえることに全部役に立つことだったと思う。この前会った先生に「日本語がうまくなった」と言われたが、自分が実際に上手になったとは思わない。ただ自分が以前から知っていたが使えなかった言葉を使える勇気＝自信を得ただけだと思う。確かに1年経たない短い時間で日本語を完璧に使いこなすということは不可能だろう。だ

が、自分が学んでいる日本語がどんな言語か、自分に何が足りないのかを“感じる”、“味わう”のには絶対短い時間ではないと思う。何よりも自分ができるという自信を得た事で初めての留学は成功ではないか。

振り返ってみるとあっという間に終わった留学だが、かつて経験した事のない初めての留学生生活をこのように無事に終えるようになった背景には、いつもお母さんのようにやさしく励まして下さった沖先生をはじめ、留学生活の始めから終わりまで、授業の全般的なことから生活の細かいことまで相談ののって下さった人文学部留学生担当坂口先生、慣れない留学生活に困る事がないように世話をして下さった留学センターの先生々、そして友達として1年間一緒だった日本語教育学専攻の学生達と、レポートの小さい疑問から留学生活の難しさや悩みまで理解してくれたチューターの鈴江卓馬君まで。皆のおかげがあったからこそ全てが可能だったと思う。改めて皆に心から深い感謝の気持ちを伝えたい。1年経たない短い時間だったし、楽しい思い出ばかりだったとは言い切れないが、韓国に帰ってもこの短い時間の中で得た事と感じた全てのことを忘れずに、貴重な経験として活かして今後、頑張りたいと思う。

一年間の留学生活

林 慶眞(イム・キョンジン)

(光云大学4年)

4月2日、名古屋空港からタクシーに乗って、どきどきしながら1年間住む松本に着いた。

その日は、今振りかえってみると、雨がぼつりぼつり降った日で、ときめきと不安が混ざった複雑な心のように曇った日だった。今、10ヶ月間、私の留学生生活を終わらせて、その時あったことを振りかえってみる。映画フィルムのように、素敵で幸せだった、そして、短すぎると感じた日々・・・私は日本に来て、運があったのか、それとも、充実した日々を過ごしたおかげか、たくさんの賞をもらった昨年だった。その中で、一番記憶に残っている一日を今から話そうと思っている。

8月の最後の週、電話がかかってきた。長野 WFP 留学生弁論大会を主催している側から参加をお願いする電話だった。様々な国の留学生の参加ができるように申し込んでくださいという頼みの電話だった。考えもしなかったこともあったが、その時ちょうど旅行の企画があったので断ろうと思ったが、いい思い出になりそうなので参加しますという返事をした。旅行は仙台で2002年日本を訪ねた時に知り合った家庭に泊まることにした。昼は旅行し、夜には寝る時間を削りながらせかせ

か原稿を作成、仙台の家族に原稿を直してもらった。原稿の内容は2002年日韓ワールドカップで盛り上がった年、1ヶ月間日本を訪ねたことについての内容だった。韓国社団法人団体が大学生100人を募集して江戸時代朝鮮通信使が歩んだ道を行列する再現行事のことだった。日韓交流が2002年ワールドカップをきっかけに始まったと思っている人たちが多いが、実際には江戸時代からであることと、私が日本にいた時、大変だったと感じたこと、そして、その時拍手を送ってくれながら支えてくれた日本人の人たちに感謝を表す内容だった。原稿を直してくれた仙台の家族は大会に出る私よりもっと一生懸命だった。お父さんはスピーチ大会でどうすれば優勝できるのかを教えてくれたし、お母さんは時間の厳守や姿勢を教えてくれた。

そして、夜の中ずっと、一緒に練習をしながら、日韓国旗を作ってくれた日本人の友達の暖かさに日本に来てよかったと思った。大会の日、私は、韓国を代表する国旗で髪を結んで、2002年ワールドカップ応援の時、着た赤い服を着た。そして、日本を代表する白い色を表すため、白いスカートをはいた。スピーチが終わる部分に用意した韓国の国旗と日本の国旗を振った瞬間、応援席から大勢の人の拍手が聞こえた。涙が出るほど心が温かくなったことを感じた。大会を通して、私が感じたことは私の日本語の実力ではなく、私を支えてくれたたくさんの人たちの暖かさだった。決して、一人ではできないかもしれなかったことが私を韓国人として認めてくれた日本人の心があったのではないだろうかと思った。

私の留学生活は特別だったとは言えない。しかし、私の周りにいる日本人の人たちの愛や支え、そして、激励があったので幸せな10ヶ月を過ごすことができた。私の人生でかけがえのない10ヶ月を心に残したまま、留学生生活を終わろうと思う。

(原文は日本語・원문은 일본어)

신주대학 유학에서 얻은 것

이윤경

가톨릭대학교언어문화학부일어일본문화전공 4학년

2004년 4월, 신주대학의 교환유학이 결정된 후, 나는 가슴이 벅찼다. 보람 찬 1년간의 유학생생활을 하기 위해, 계획을 세우기 시작했다. 이전, 2000년 7월부터 2001년 6월까지 어학연수를 한 경험이 있어서, 2번째 유학은 더 의미가 깊었다.

동경의 일본어학교에서 할 수 없었던 여러가지를 하게 된다면 좋겠다고 생각했다, 10개월이 지난 지금 되돌아 보면, 무척 많은 것을 경험하지 않았나 싶다. 일본 대학생과 똑같이, 공부도 같이 하고, 여러가지 교류도 하였다. 또 일본의 전형적인 문화 체험도

하였다. 일본에 오기 전에는 실제로 할 수 있을까 불안했지만, 선생님의 덕분에 모든 걸 이룰 수 있었다.

우선, 일본어교육 전공 학생들의 친절함을 비롯하여, 교수님의 세심한 배려로 꽃꽂이 감상이나, 홈스테이를 통한 문화체험 등, 전부 신주대학이 아니었다면 할 수 없었던 것들이다. 또, 유학생센터의 전통문화실습이라는 수업을 통해, 여러가지 경험을 할 수 있었다. 예를들면, 코또나 삼미선, 서에나 민요, 하이쿠등 여러가지를 몸소 체험할 수 있었다. 그리고, 그것이 계기가 되어서 다도를 배우기 시작했다. 다도 야자와 선생님과 알게 되어, 다도 이외에도 화과자 만들기, 기모노 입는 법등을 접할 기회가 있어서, 무척 좋았다. 유학생 입장인 나에게, 딸처럼 친절히 대해 주셨다. 또, 3월에는 우리에게 입문 교정도 받을 수 있었다.

또, 홈스테이를 통해 일본가정의 분위기를 맞출 수 있었다. 선생님의 소개로, 연말연시 2박 3일간 홈스테이 한 것이 계기가 되어, 지금도 계속해서 교류를 하고 있다. 가끔 집에 놀러 가거나, 식사등 하면서 딸처럼 형제자매 처럼 자연스럽게 문화체험을 할 수 있었다. 일본의 전형적인 행사나 여러가지 이야기를 통해, 그리고 사진등을 보면서, 일본과 한국의 공통점을 발견할 수 있었다. 일본과 한국이 아닌, 같은 아시아인이라는 것에 새삼 깨닫게 되었다. 홈스테이 집의 아버지와 어머니는 제 2의 나의 부모님이며, 홈스테이 집의 여러분들은 제 2의 나의 가족이며 동시에 소중한 사람들이다.``

많은 문화체험이외에도, 대학생활에서 정말 큰 수확이 많았다. 한국에 흥미를 가진 일본인 친구들과의 교류를 통해, 한일이 아닌, 같은 아시아의 대학생이라는 생각을 가지게 되었다. 또, 일본대학생들의 일반적인 대학생활을 맞볼수 있었다. 같이 집에서 오꼬노미야키를 만들어 먹으면서, 술자리등 모임에 참가하며, 일본 젊은 이들의 문화를 맞볼 수 있었다.

그래도, 신주대학에서 가장 뜻깊었던 것은, 오끼 선생님의 일본어교육학개론과 현대일본어학연습 1이라는 수업이다. 대학원 진학을 목표로 하는 나로써는, 처음 세미나 수업에 참가하여 여러가지 면에서 도움이 되었다. 레주메 작성 방법이나 발표 방법등, 또 그룹 발표 준비를 통해, 일본 대학생들과 똑같이 수업에 참가하게 되어, 수업 전부가 공부가 되었다.

이것 외에도, 인문학부나 유학생센터 의 많은 행사참가를 통해, 말로 표현할 수 없는 뜻깊은 일을 많이 경험하였다. 사과따기나 친선 교류 파티, 온천 여행등은, 일본에서 처음 경험한 것이다.

이런 많은 것은 신주대학이 아니면 안 되는 것들이었다. 모두 할 수 있도록, 여러가지로 지도 해 주신 오끼 선생님께 큰 감사의 마음을 전하고 싶다. 또 같은 한국인이면서, 여러가지로 상담를 주신 연선생님, 일본어를 지도해 주신 사또 선생님, 사끼구찌 선생님등, 신주대학의 선생님들께 많은 신세를 졌다.마지막으로,송별회를 열어준일본어교전공학학생들에게도 감사하고 싶다. 약 1 년간에 걸친 신주 대학에서의 교환유학은, 평생 잊지 못 할 , 큰 추억이며 재산이 될 것이다.

일본에서의 1 년

이연주

가톨릭대학교언어문화학부일어일본문화전공 4 학년

2002 년은 나의 인생에 있어서 소중한 한 해였다. 가톨릭대학교 4 학년 재학중 교환학생으로서 선발되어 나가노 신슈 대학에서 공부하게 된것이다. 일본에 오기전에는 보통의 학생들과 같이 대학 생활을 만끽하고 있었다. 게다가 일본어를 공부하고 있었음에도 불구하고 일본에 와 유학생생활을 하게 될것이라고는 생각조차 해본적이 없었다. 그러나 4 학년에 재학중이던 어느날 학교 게시판에서 교환학생에 관한 모집요강을 보게 되었다. 그때, 나의 인생에 새로운 활력을 불어넣고 동시에 얼마 안 남은 대학생 생활을 멋지게 장식하기 위해 서둘러 응모했다. 신슈대학에서의 1 년간의 경험은 돌이켜 생각해 보면, 많은 점에 있어서 유익한 경험이었다고 생각된다. 그래서 이 지면을 빌려 감회어린 1 년간을 회상해 보고자 한다.

첫째로, 일본의 전통문화를 체험할수 있었다는 것이다. 유학생을 위한 전통문화 실습이 계기가 되어 다도에 접할 수 있었던것은 정말로 행운이라고 생각한다. 처음 다도를 접했을때는 차를 마실때 왜 그렇게도 어려운 예의범절이 필요할까 라고 생각했지만,그 수업을 통해서 다도의 깊고 오묘함과 즐거움을 느낄수가 있었다. 그리고 수업을 통해 알게된 아자와 선생님으로부터 본격적인 가르침을 받게 되었다. 일주일에 한시간 밖에 안되는 시간이지만 그 시간을 통해, 일본의 전통문화의 한 단면을 이해 할수 있었다. 그리고 이것도 전통문화의 체험일지도 모르지만, 신슈대학에서 궁도부 활동을 하게 된 것이다. 궁도부에 들어 갈 수 있었던 것은 그 전부터 궁도부 활동을 하고 있던 후배의 역할이 컸다. 부활동을 시작하게된 첫번째 이유는 많은 일본인 친구를 사귀려는 의도에서 였다. 물론 부활동을 통해 친구가 생긴것은 말할 필요도 없지만 더 큰 수확이라 할수있는 것은 궁도 그 자체이다 . 궁도부도 다른 운동부와 마찬가지로 매일 반복적인 연습을 하고 있었다. 연습을 매일매일 하는 사이, 정말로 궁도 그자체를 좋아하게 된 것이다. 그리고 그연습의 결과,2003 년 3 월에는 초단이라는 자격도 획득 할 수 있었다. 여담이지만 궁도덕에 오른쪽 팔이두꺼워져왼쪽과의균형을잃고말았다.

그리고둘째로,일본의보통가정의모습을접할수있었던점이다. .2003 년 2 월,지도교수님인 오키선생님의 소개로 홈스테이를 하게 된것이다. 인연을 맺게 된 가정은 고바야시 가족이었다. 고바야시 가족과는 1 월에 처음 만나게 된 이후부터 지금까지도 연락을 주고 받고 있다. 고바야시 가족모두는 언제나 친절하게 마치 딸 처럼 대해 주셨다. 게다가 일본의 명소에도 데려가 주셨는데 ,예를 들면 카미코치,타카야마,노리쿠라등 일본여행의 절반이상이 고바야시가족과 함께했다. 일본의 절경을 볼 수 있었던 소중한 여행이었다. 그 뿐만이 아니라 이플때는 병원에도 데려가 주시는등 자칫 소홀해지기 쉬운 유학생의 건강에도 많이 신경을 써 주셨다. 그래서 정말로 항상 감사하게 생각하고 있다.

그리고 마지막으로 신슈대학에서의 수업경험이다. 외국인으로서 일본인 학생들과 같은 수업을 받는다는 점에서 상당한 스트레스를 받았었지만 그래도 나름대로 많은 것을 느낄 수 있었다. 한 수업을 예를 들면, 메주 학생들의 발표로 수업이 진행되기 때문에 언제나 긴장을 했던 기억이 있다. 그러나 현지 일본어 습득과 일본사정을 접할 수 있었던 점은 좋은 경험으로 남을 것 같다. 또 세미나 수업의 경우에는 깊이있게 일본어 교육의 방법론을 배울 수 있었다.

위에 언급한 것만으로도 마츠모토 신슈대학에서 얻은 것은 지금까지 경험해 보지 못한 즐거움이었다. 1년간의 유학생생활을 통해 다양한 사람들과의 만남, 다양한 경험들은 인생에 있어서 틀림없이 큰 재산이 될 것이며 또 새로운 출발점이 될 것이라고 믿는다.

일본에서의 낯선 생활을 잘 이끌어 주셨던 지도교관 오키 선생님, 인문학부의 사카구치 선생님 그리고 유학생센터의 사토 선생님께도 감사의 말을 전하고 싶다.

일년간의 유학생생활

김영주

가톨릭대학교언어문화학부일어일본문화전공 4학년

나는 신슈대학에 오기 위해 한국에서 면접을 봤을 때[2003년 일본에서 공부하는 것이 인생의 계획중의 하나입니다.]하고 말했을 정도로 일본에서 공부하고 싶었다. 그래서 신슈대학에 가는 게 정해진 이후에는 [후회하지 않도록 최선을 다하자.]라고 다짐하며 [뭐든지 적극적으로 경험할 것, 일본에서만 배울 수 있는 것을 익힐 것, 사람들과의 만남을 소중히 할 것]을 이루고자 노력했다.

우선, 여러 경험을 하기 위해 방학이 되면 나라, 오오사카, 시즈오카, 니이가타등을 여행했다. 여행 중, 바닷가에서 손목을 뻗 적도, 찜통같은 더위에 아토피성 피부염이 심해진 적도 있었다. 그러나 내 자신을 더 강하게 단련시킨 기회가 되었다고 생각한다. 또 마지막 여행으로 나라이와 키소후쿠시마를 혼자서 여행한 것도 좋은 추억이 되었다. 그리고 일본 친구들과 더욱 접하기 위해서 2주일에 한번 한국요리 교실을 열었다. 한국요리에 관심이 있는 신슈학생들에게 만드는 법을 가르쳐주고 싶다고 생각한 것이 그 동기였다. 단순히 재미있겠지 싶어서 시작한 일이 생각보다 손이 많이 가고, 신경 쓸 일들이 많아질 때에는 힘들기도 했다. 하지만 공민관을 빌리는 일부터 쓰레기를 처리하는 일까지 책임을 지면서 책임감과 보람을 배울 수 있는 기회가 되었다. 다행히도 요리교실은 순조롭게 진행되어서 1월 30일에는 공민관 관장님의 부탁으로 일본인 주부를 대상으로 한 요리교실을 열게 되었다. 나는 닭도리탕과 부침개의 견본을 만들어보였고, 한국의 조미료를 나눠주기도 하였다. 마지막 요리교실이 무사히 끝나 한숨을 내쉬며 조리실을 나설 때의 그 기분은 잊을 수 없을 것 같다.

또, 일본에서 밖에 배울 수 없는 것을 익히기 위해 다도를 시작하였다. 선배언니가 다도를

배우고 있었기 때문에 시작하기도, 선생님과 접하기도 쉬웠다. 나는 단지 차를 탈 때의 절도 있는 모습이 멋있게 보여서, 일본과자와 ‘마차’ 라는 녹차가 맛있어서 시작하게 된 것이다. 하지만 무릎꿇기가 안되어서 너무 너무 힘들었다. 일 분도 지나지 않았건만 다리가 저려와서 과자와 녹차의 맛이 느껴지지 않던 때도 있었다. 그래서 다도를 시작하고 2개월이 될 때까지는 [죄송한데요. 저 그만 두고 싶어요.]라는 대사를 준비해서 다닐 정도였다. 하지만 나는 시간이 지나면 지날수록 다도가 좋아졌다. 학교나 집안 일은 모두 잊어버리고 편안한 마음으로 차를 탈 수 있는 금요일 3 시가 좋아진 것이다. 선생님과 함께 차를 마시면서 이야기를 하고 있으면 검은 고양이 ‘미짱’ 이 스스로 문을 열고 들어오곤 했다. 미짱은 기분이 좋을 때면 내 무릎위에 앉아 주기도 하였다. 미짱 때문에 다리는 감각이 없어질만큼 저렸지만 무서워서 만지지도 못했던 고양이와 친해진 것이 기뻐서 꼭 참으면서 무릎을 꿇고 있었다. 더 기쁜 건, 9 개월동안 다도를 배운 것이 인정받아, 인정서도 받을 수 있게 되었다.

마지막으로 사람들과의 만남을 소중하게 여겨서 두 분의 부모님이 생겼다. 나는 답임 교수님께 호스트 패밀리인 코바야시 가족을 소개 받아서 가끔 저녁을 먹으로 가곤 하였다. 홀로 외로웠던 나는, 학교에서 있었던 일들을 이야기하거나 힘든 일이 생기면 상담을 하기도 하였다. 특히 코바야시씨의 부인과 나는 요리에 관심이 많아 일본 요리를 만들어 주시거나, 내가 한국 요리를 만들어 드리면 무척 기뻐해 주셨다. 나는 코바야시씨의 가족과 친해지면서 나라와 문화는 다를지라도 정성을 다하면 마음은 통하는 법이라고 생각하게 되었다. 작년 9 월에 한국에서 우리 부모님이 오셨을 때, 코바야시씨가 집에 초대도 해주시고, 같이 여행도 해 주셔서 진심으로 감사하게 생각한다. 코바야시씨 가족 덕분에 즐거운 여행을 한 우리 부모님은 코바야시씨 가족이 한국에 놀러 오는 것을 기대하고 계신다.

일본에서의 일년, 공부, 여행, 만남을 통해 경험한 것은 내 인생의 값진 보물이 될 거라고 확신한다. 특히, 나의 출세를 기다려 주시겠다고 약속한 코바야시씨의 가족은 내 인생의 길잡이가 되어 주실거라고 생각한다. 이 모든 것을 경험할 수 있도록 기회를 주신 오키 선생님과, 강 선생님, 이 선생님께 감사의 마음을 전하고 싶다.

귀중한 신슈에서의 1 년

정병희

가톨릭대학교언어문화학부일어일본문화전공 2 학년

처음으로 경험하게 될 유학생들은 설레임 반, 두려움 반의 두근거리는 새로운 시작이었습니다. 나고야 공항에 도착한 우리들은 마쯔모토로 가는 알피코 버스안에서 여기가 정말 일본이야? 우리가 진짜 유학을 하게 되는거야?라는 대화를 하며 유학생들의 첫날을 아직 실감하지 못하고 있었습니다. 내가 정말 잘 해낼 수 있을 것 인가? 라는

두려움과 열심히 해야지라는 굳은 각오가 나의 머릿 속을 가득 채우는 동안 버스는 달렸고 3 시간 정도 후 우리는 마쓰모토에 도착했습니다. 역에는 미중나온 일본어교육학 친구들이 기다리고 있었습니다. 일본에서의 첫날, 아이하의 방에서 아이하와 이야기 하면서도 굉장히 긴장했던 것이 기억이 납니다. 내 발음이 이상하지는 않나? 내 말이 이해가 되었을까? 라는 생각들로 나의 유학생생활은 시작되었습니다.

수업이 시작되는 9 일까지는 하루하루가 바쁜 생활의 연속이었습니다. 여기 저기 설명회에 참가하라, 시청과 은행을 돌아다니면서 여러가지 서류를 작성했습니다. 이런 바쁜 스케줄 속에서 우리를 도와 준 건 도우미를 하고 있는 친구들이었습니다.

드디어 1 학기 수업이 시작되었습니다. 나는 유학생 센타 수업과 1 학년 공통수업, 인문학부 수업을 병행해서 들었는데, 센타 수업은 생각보다 그리 어렵지는 않았습니다. 센타 수업에서 가장 기억에 남는 수업은 전통문화실습이라는 수업입니다. 마쓰모토 공예를 체험하기도 하고 단가를 지어 보기도 했습니다. 내가 지은 단가가 일본 전국 단가 대회에서 특별상을 받은 것은 정말 잊지 못할 추억으로 남을 것 입니다. 기모노를 입어보기도 하고, 사도를 배우기도 하고, 이 수업은 좀처럼 접하기 힘든 일본 문화를 몸으로 체험한 좋은 기회였다고 생각합니다.

1 학년 공통 수업은 주로 한국과 관련 된 수업을 들었습니다. 연선생님의 권유도 있었지만 한국과 관련 된 수업을 통해 한국에 관심이 있는 일본 학생들에게 한국을 알리고 친구도 될 수 있을 좋은 기회라고 생각했기 때문입니다. 수업 중에 가끔씩 일본 학생들에게 질문을 받아서 대답을 한 적이 있습니다. 처음에는 내 발음이 이상해서 일본 학생들이 웃기라도 하면 어찌나...라는 걱정에 창피했었지만 점점 편안하게 대답하게 되는 나의 변화에 내 자신도 놀란 적이 있습니다. 연선생님의 수업은 내가 수업을 듣기 전에 생각했던 모든 부분을 채워 주셨습니다. 일본 친구들과 자연스럽게 어울릴 수 있었고 한국에 대해 알릴 수 있었기 때문입니다. 특히 1 달에 1 번정도 열었던 한국요리회는 일본 친구들과 함께 음식을 만들며 편하게 대화할 수 있었던 귀중한 시간이었습니다. 1 년동안의 유학생생활에서 연선생님은 때로는 어머니, 때로는 언니가 되어 주셨습니다.

인문학부 수업은 나에게 가장 어려웠던 수업이었습니다. 일본어 교육학 개론은 20%밖에 이해가 되지 않을 때가 있어서 내가 이 수업을 끝까지 들을 수 있을까?라는 생각을 했습니다. 하지만 1 학기를 마치고 성적을 받았을 때는 내 나름대로의 자신감과 함께 2 학기에도 다시 듣고 싶은 수업이 되었습니다. 2 학기에는 자신감이 생긴 덕분에 일본 문학 개론도 들었습니다. 한국에서 일본 문학을 별로 읽지 않았기 때문에 수업을 이해하는 것은 힘들었지만 숙제나 레포트를 쓰기 위해 일본 문학을 읽으면서 관심이 없었던 일본 문학에도 관심을 갖게 되었습니다.

1 년간의 유학생생활을 되돌아 보면 힘든 일도 있었지만 그 보다는 즐겁고 기뻐진 일들이 더욱 많았습니다. 그렇기에 웃으며 1 년을 마무리 할 수 있을 것 같습니다. 특히 많은 사람들과 만나 많은 추억을 만들 수 있었습니다. 오키선생님의 소개로 알게 된 나카가와상택은 나의 제 2 의 가족이 되어 주었습니다. 장녀인 나는 어렸을 때 부터 언니나 오빠가

있었으면 했었는데 그 소원이 이루어진 것입니다. 나카가와상 택에서 머물고 생활하면서 나는 일본의 평범한 가정을 경험할 수 있었습니다. 혼자였으면 쓸쓸했을지도 모를 설날도 가족과 즐겁게 연휴를 보낼 수 있었습니다.

그리고 5 월달 부터 사도를 배우며 알게된 아자와선생님께서 손수 만드신 과자와 차를 마시며 1 주일은 반성하고 계획할 수 있는 소중한 시간이 되었습니다.

마지막으로 내가 제일 좋아하는 친구들! 처음에는, 일본인은 겉과 속이 달라서 친구가 되기 힘들 것이하고 생각했었지만 많은 친구들과 만나며 나의 고정관념은 깨지게 되었습니다. 많은 친구들이 1 년간 나를 끌어 주었지만 , 특히 나의 도우미를 맡은 아이하와 산보친구 가나에상에게 감사의 마음을 전하고 싶습니다. 숙제나 레포트를 쓸 때 뿐만아니라 나의 생활 전반의 힘이 되어준 아이하, 거의 매일 함께 산보를 하며 나의 고민과 여러가지 이야기를 들어준 가나에상, 소중한 친구들과 헤어지는 것은 정말 슬프지만 완전한 헤어짐이 아니기에 웃으며 헤어지려 합니다.

1 년간 나를 도와준 모두에게 부끄럽지 않은 내가 되기 위해, 다시 한번 새로운 시작을 하려고 합니다. 한국에 돌아가서도 언제나 이 1 년을 기억하며 나의 자리에서 열심히 노력할 것 입니다.

짧은 유학을 마치며

최현범

가톨릭대학교언어문화학부일어일본문화전공 3 학년

외국어 전공의 학생에게 자신의 실력을 향상시키기위해 유학은 한번쯤 경험해봐야 하는 일이다. 그러나 한국의 남자는 군대를 마치기전에는 장기간의 해외여행과 유학은 법적으로 제한되기 때문에 군역을 마치기전의 유학은 대단히 어려운일이다. 그래서 군역을 마친 2002 년은, 나도 반드시 국비유학이나 교환유학시험을 보리라고 다짐하고 있었던 때였다. 운 좋게 복학후 교환유학생시험에 합격해서 2003 년은 신슈대학에서 유학을 하게 되었다. 그러나 난생처음의 유학이라는점에서 기대와 기쁨도 많았지만 걱정도 상당했다. 언제나 돌봐주던 가족과 친한 친구들과 떨어져 외국에서 혼자생활을 해야한다. 그리고 정해진 생활비로 생활하지 않으면 안된다. 당연한 모든일에 불안감을 느꼈다. 드디어 일본에 도착한 4 월 1 일, 나고야 공항에서 마츠모토로 가는 버스안에서도 이 불안은 계속되었다. 하지만 마츠모토역에서 반겨준 일본어교육전공 학생들을 보자 불안감은 어느새 유학에대한 기대로 변하고 있었다. 나의 첫번째 유학은 이렇게 시작되었다.

확실히 할수있는 얘기는, 유학생생활은 긴장의 연속이라는 것이다. 이 긴장은 자신의 실력과 능력에 대비해하는 것이겠지만 무엇보다도 어딜가도 자신의 모어가 아닌 외국어로 듣고 말하는일이 가장 피곤한 일이었다. 처음 가장 힘들었던 것도 물론 그 「언어의 벽」 이었다.

한국어와 일본어는 문법도 비슷하고 같은 한자권 국가이므로 어휘면에서도 그다지 차가 없을 것이라고 일본 나는 일본어가 생각이상으로 한국어와 다른 점에 놀랐다. 물론 한자와 어휘가 부족한 내가 고생한건 말할필요도 없었다. 거기에 단어는 알고있으나 정확한 발음이 되지않아 상대방에게 통하지 않았던 일도 많았다. 매우 답답하고 피로운 일이었다. 지금 돌이켜 생각해보면 그런 이유로 처음의 반년동안은 거의 병어리였었다. 그러나 유학생들은 자신의 노력없이는 무엇도 주지 않는다. 그래서 12월에 있는 일본어 능력시험을 준비하면서 어휘를 늘리려는 노력과 노래와 뉴스를 들으며 회화의 연습을 한 것, 그리고 무엇보다도 실제로 많은 사람들과 대화를 나눴던 경험이 지금의 일본어 실력에 많은 도움이 되었다고 생각한다. 얼마전엔 만난 선생님께서 부터 「일본어가 많이 늘었다」는 얘기를 들었지만 나의 일본어가 숙달되었다고는 생각하지 않는다. 단지 이전에 알고있던 말을 쓸수있는 용기, 즉 자신감을 얻었을뿐이라고 생각한다. 분명 1 년도 채 되지 않는 짧은 기간에 일본어를 완벽히 구사한다는건 불가능할것이다. 하지만 자신이 배우고있는 일본어가 어떠한 언어인가, 자신에게 부족한점은 무엇인가를 “느끼고 맛보는” 기간으로서는 절대 짧은 시간이라고 생각하지 않는다. 무엇보다도 자신감을 얻은 것으로 첫번째 유학은 성공이 아닐까.

뒤돌아 보면 순식간에 끝난 유학이지만 이전에 경험해본적없는 유학생들이 이처럼 무사히 끝날수있었던 것에는 언제나 어머니처럼 격려해주신 오키 교수님을 비롯, 유학생들이 끝날때까지 수업의 전반적인 일부터 생활면까지 상담해주신 사카구치 교수님, 익숙하지 않는 유학생들에 관한점이 없도록 신경써주신 유학센터 선생님들, 그리고 친구로서 1년간 함께했던 일본어 교육전공 학생들과 레포트의 작은 의문부터 유학생들의 곤란함까지 이해해준 튜터의 스즈에 타쿠마군까지. 1 년도 채 안되는 짧은 기간이었고 기쁜일만 이었다고는 단언할수 없지만, 한국에 돌아가서도 이 짧은 기간에 얻었던 것과 느꼈던 모든것을 잊지 않고 귀중한 경험으로 살려서 이후도 노력하고 싶다.

일년간의 유학생생활

임경진

광운대학교 4 학년

4월 2일 나고야 공항에서 택시를 타고 셀레이는 마음으로 내가 1년동안 살 마츠모토에 도착했다. 그날은 지금 생각하면 비가 추적추적 내리던 날로 셀레임반, 두려움반으로 뒤섞인 복잡한 심정같은 흐린날로 기억된다. 지금 10 개월, 나의 유학생생활을 마치고 1 년동안 있었던일을 되돌아보려고 한다. 영화필름처럼, 멋지고 행복했던 날들 꿈만 같았던 너무나 짧게 느껴진 나날들...나는 일본에 와서 운이 좋았던 케이스인지 아님 하루하루 충실한 나날들을 보낸 덕이었던지 상복이 많았던 한해였다. 그중에 가장 기억에남는하루를 지금부터 이야기하려고 한다.

8 월 마지막주 한통의 전화가 걸려왔다. WFWP 유학생변론대회를 주최하는 측에서 한국인 대표로 유학생변론대회에 참가해달라는 전화였다. 여러나라의 유학생들이 참가하기를 바란다며 한국인 유학생이 없기 때문이라며 내 연락처를 어떻게 알았는지 부탁의 전화가 걸려왔다. 생각도 하지 못했던것도 있었지만 그때 마침 여행계획이 있어서 거절하려고 했지만 좋은 추억이 될것같아 참가하겠다는 의사를 표했다. 여행은 센다이로 작년에 알게 된 홈스테이 가족집에 머물게 되었다. 낮에는 여행을 하고 밤에는 자는시간을 줄여 부랴부랴 원고를 작성, 센다이 일본가족에게 원고의 수정을 받게 되었다. 원고의 내용은 2002 년 한일월드컵으로 뜨거웠던한해 1 달동안 일본을 방문한 내용이었다. 한국사단법원에서 대학생 100 명을 모집해 에도시대 조선통신사가 걸어온 길을 재현하는 재현행사에 참가했던 내용이었다. 한일 교류가 2002 년 월드컵을 계기로 시작되었다고 생각하는 사람들이 많지만 에도시대부터 교류를 시작했다는 내용과 내가 일본에서 체류했던 당시 힘들었던 기억 그리고 그 힘들었던 시간속에 함께 응원을 하면서 도와줬던 일본인들에 관해서 감사의 표시를 고하는 부분이 들어있었다. 원고를 수정해준 센다이 가족들은 대회에 나가는 나보다 더 열심히 임했다. 아버지는 스피츠대회에서 어떻게 하면 우승할수 있는지 원고를 체크해주고, 어머니는 시간체크와 자세교정을 봐주었다. 또한 밤새도록 대회전날까지 함께 연습을 같이 해주며, 한일국기를 같이 만들어준 일본친구의 고마움에 일본에 와서 정말로 행복하다고 생각했다. 대회날, 나는 한국을 대표하는 국기로 머리를 묶고, 2002 년 월드컵 응원당시 입었던 빨간티를 입었다. 그리고 일본을 대표하는 흰색을 강조하기위해 하얀 스커트를 입었다. 스피치가 끝나는부분,,,,, 밤새 준비한 한국과 일본국기를 흔들면서...스피치를 마치는 순간 응원석에서 수많은 사람들의 박수가 들려왔다. 눈물이 날만큼...마음이 따뜻해지는것을 느꼈다. 대회를 통해서 내가 느낀것은 나의 일본어 실력이 아닌, 나를 격려해준 수많은 사람들의 따뜻함이었다. 결코 혼자서는 헤낼수 없었을지도 모르는 일을 나를 한국인으로써 인정해주는 주위에 있는 일본인들의 도움으로 헤낼수 있었던것인지 모른다.

나의 유학생생활은 그리 특별히 지냈다고는 할수 없다. 하지만 내 주위에 있는 사람들의 사랑과 격려, 그리고 도움으로 참으로 행복한 10 개월을 보낸것 같다. 내 인생에서 바꿀수 없는 10 개월을 이제 마음속에 남겨둔채 마치려고 한다.